

五所川原市

狐野製鉄遺跡

〔第一次発掘調査概報〕

1979. 3. 1.

青森県五所川原市教育委員会

序 文

五所川原市教育委員会

教育長 小 山 吉之助

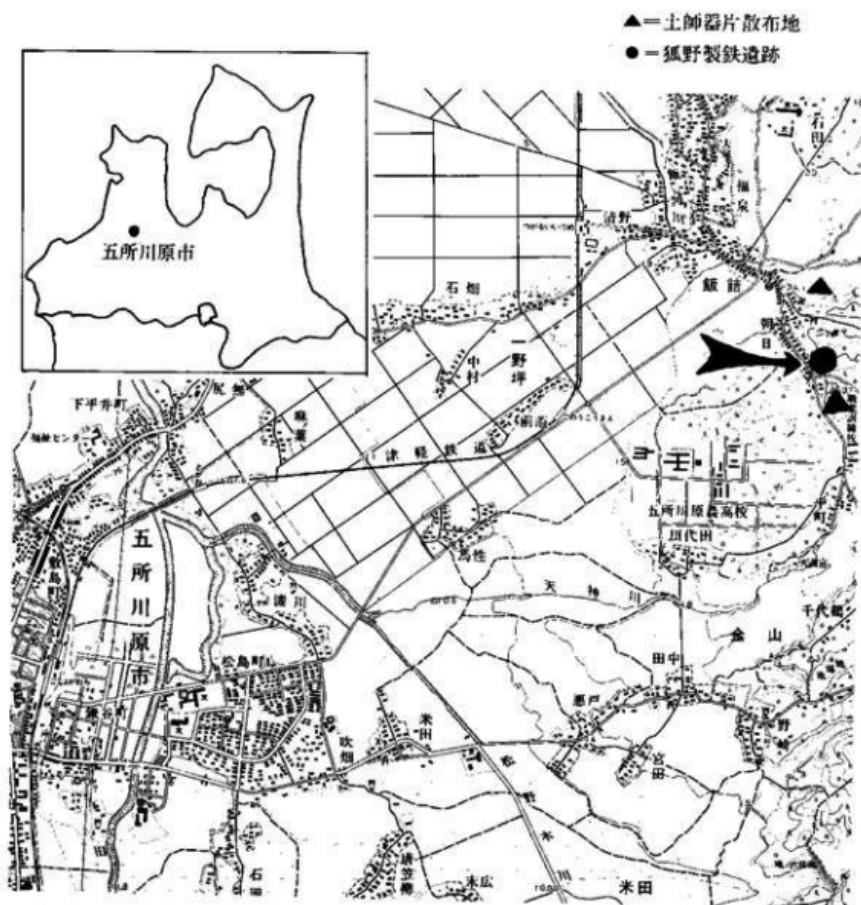
去る昭和52年6月、市内飯詰在住の対馬卓美氏より通報があった。「狐野製鉄遺跡」は、当市における貴重な文化遺産の一つであることが、予備調査の段階で確認されました。

そのため、当教育委員会では、社会教育課が主管となり、この遺跡の発掘計画をたて、昭和53年7月26・27日の2日間、試掘を実施したものです。

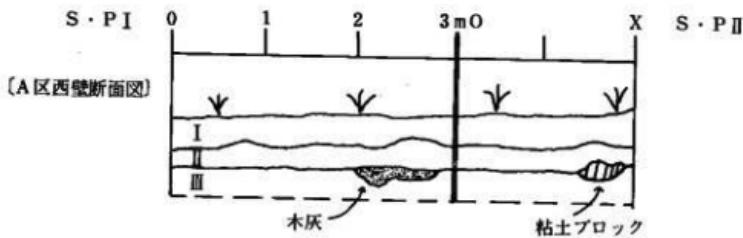
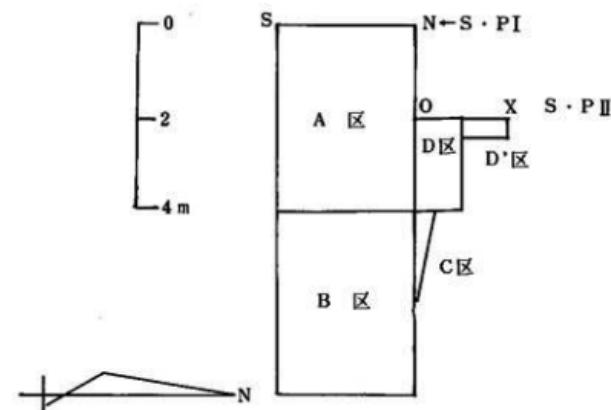
試掘の結果は、以下に述べる概報のとおりであります。当市の歴史時代における製鉄址の解明は、当時の人々の生産様式や物質文化。あるいは、技術史の発展等々、郷土の先人たちの努力と、その文化遺産を明らかにする手がかりになるものと確信します。

末尾ながら、当五所川原市の古代史解明に努力された発掘隊の諸氏、ならびに地主である対馬卓美氏のご厚意に感謝申しあげる次第であります。

(図1) 遺跡付近地形図



(図2) グリット配置図、およびセクション図



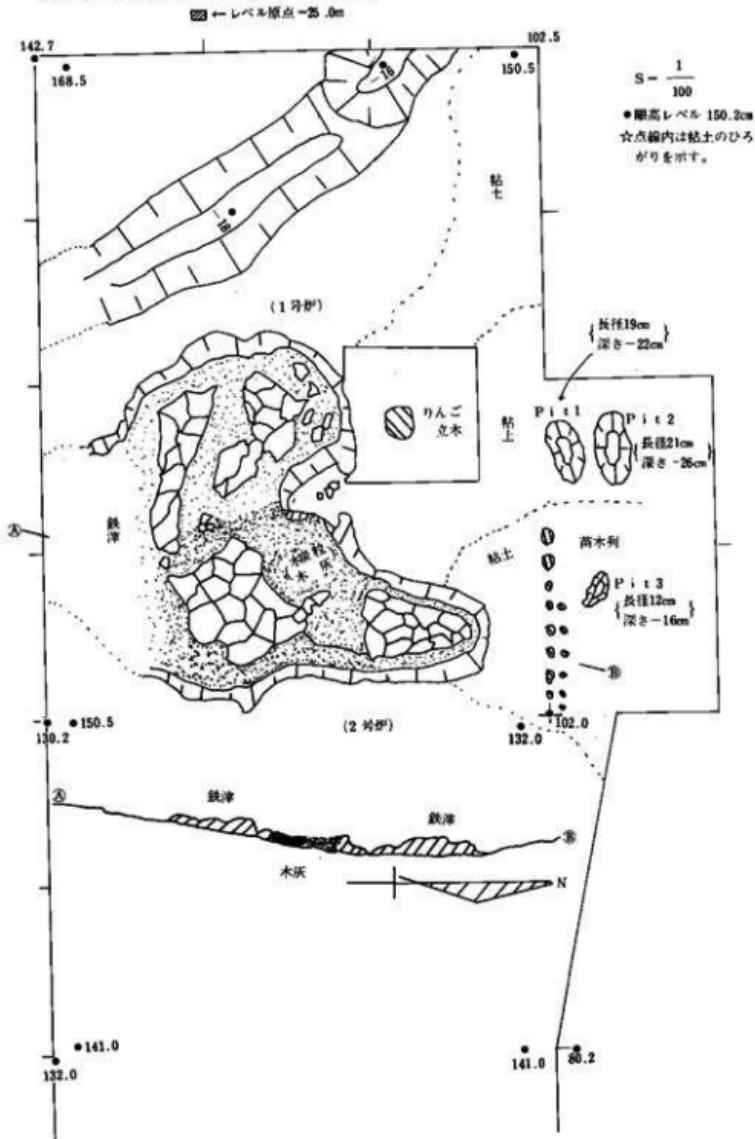
{
 I - 表土 (黒色土、植物根を含む)
 II - 黒褐色土 (木灰・木炭粒を含む)
 III - 赤褐色土 (木炭粒・木灰を含む)

☆I層は粘質なく、サラサラしたものである。

☆II層は、木灰・木炭粒が、下位程多く、また粘質も下位程多くなる。

☆III層は、上面に木灰、木炭粒を多く含むため黒く見えるが本来的には赤褐色土である。上面は焼けて固いが下位には粘質がある。

(図3) 狐野製鉄遺跡平面図(未完掘)



〔はじめに〕 (図1 参照)

狐野製鉄遺跡は、青森県五所川原市大字飯詰字狐野169-14 にあり、土地所有者対馬卓美氏住宅の裏山にある。

○この地点は、飯詰部落の東南にあって、この付近には、高橋城址、二ツ森等の伝説に富む史跡がある。また近くには、飯詰川・その南方には天神川があって、北流・および西流して津軽平野をうるおしている。

高橋城址は、独立峰を利用して築城され、その山麓には内堀があり、この内堀を隔てた南方には、標高約40m の単峰がある。この単峰の南斜面の末端に狐野製鉄址が所在する。

そして、この南斜面の末端は、天然の小谷を開削して小水路がある。これは高橋城の外堀とされるところである。

この外堀とされる小谷の南には、二ツ森のいま一つの単峰が、標高60.7m で聳えている。

すなわち、当狐野製鉄遺跡は、高橋城ののろし台として利用されたと伝承される二ツ森北峰の南斜面に位置し、高橋城の外堀の内側にあることになる。

遺跡は、昭和52年、土地所有者である対馬卓美氏が、りんごの苗木を移植するため、穴を掘ったところ、鉄滓や羽口片を発見したとの通報があり、予備調査の結果、製鉄址の可能性を認めたので、今回の発掘となったものである。

発掘は、昭和53年7月26日・27日の2日間行なわれた。以下その概要について述べることにする。

〔発掘経過〕 (図2 参照)

グリットは、土地所有者対馬卓美氏の発見された、鉄滓・羽口の出土地点を中心に、南北3m東西8mの長方形に設定・西半分をA区・東をB区とした。またその後拡張して、c・d区を設けた。

りんごの木の空間を利用したグリットの設定であるが、A区に1本、B区に1本のりんご木がグリット内に含まれる。

発掘は、A区・B区を併行して行なう。A区では、昨年の予備調査の際、埋めもどした鉄滓・羽口を発掘し、その周辺を拡大しつつ遺構の範囲を捉えようとした。

またB区では、第I層より剥ぎとりにかかる。

A区では、第III層上面において、焼土と鉄滓・羽口片の密集地点を検出する。

また、A区西壁北側より、A区の中央南へかけて溝状の遺構を検出する。この溝状遺構は、第II層を堀り込んで構築されていた。

また、A区東側より、2か所にわたって、鉄滓の板状堆積を検出する。(図3参照)

A区西側の北方は、りんご立木のため発掘不能であり、南方も同様である。北の方の苗木列を避けながら、C・D区を設定し、第I・II層を剥ぎとる。そこより、柱穴状のpit1～pit3を検出する。

また、全体を精査する過程で、粘土のひろがりを認める(図3)、このものは人工的なものかどうかは、ベースまで掘り下げた上で結論を出したい。

7月26日は、A区では、第III層上面の遺構検出で終了。B区は、第I・II層を剥ぎとるも遺構の検出はなく、土師器片、須恵器片、および、繩文土器片を第II層より検出した。(写4-9~15・21~23)

● 7月27日は、粘土のひろがり、遺構の範囲と壁面を確認し、平面図および土層断面図を作成する。

遺構は、北方へ延びているように判断されるので粘土のひろがりと、pitの配置を検討しなければならない。

しかし、苗木、立木のため現状のままでは発掘の続行は不可能である。

発掘に自ら進んで参加された対馬卓美氏は、事情を察して、明春、りんごの立木を移植してくれる由の申し出があり、明年発掘を続行することにする。

そのため、製鉄址内の遺物は、一切取りあげず、埋めもどしを行う。

〔層 序〕 (図2 参照)

層序は、図2に示したとおりであるが、第Ⅲ層については、発掘した深さまでのものであつて、ベースであるかどうかは、第二次調査まで保留しておきたい。

☆第Ⅰ層…表土→22~35cm

(黒色土、植物根・樹根を含み、粘質ではなく、サラサラしている。)

☆第Ⅱ層…褐色土→20~38cm

(木灰・木炭粒を混入し、その量は下位程多くなる。また、粘質も下位程強くなるものである。)

図2のセクション図は、A区西壁をセクションポジションとして作成したものである。現在の地表は、北より南に傾斜している地形であるが、発掘地点では、それが層序にあらわれていない。この地点で、平面をなすものようである。

遺構は、第Ⅲ層を掘り込んで構築されていた。

〔遺 構〕 (図3、写1~写3 参照)

☆製鉄址

（遺構長軸 (Ⓐ-Ⓑ) →約 1.3m → (2号炉)
東西最大幅 →約 1.1m → (1・2号炉)
壁 高 (未完掘) →約 8~12cm → (2号炉)）

☆溝状遺構

（中央部長径）→約 1.2m
（最 大 幅）→約 34cm
（深さ→確認面より）→約 18~16cm
付属施設？

☆柱穴状pitと粘土のひろがり (図3)

遺構は、製鉄遺構と、その付属施設と思われる溝状遺構、および柱穴状ピット(pit)、粘土のひろがり等からなっている。

これらのものの、相互関係や、それぞれの性格等については、完掘しなければ判断はできないのであるが、現段階における所見を基にして、以下、仮説的に述べてみたい。

・製鉄址について…図3に示したように未完掘であるため、全体形および構造は不明であるが、

鉄滓、羽口の出土から、製鉄に関する遺構であることは間違いないところであろう。

図3のように、製鉄址は、A区の中央部に、第Ⅲ層を掘り込んで構築され、その計測値は、既述したとおりである。

製鉄址の西側半分（1号炉）の北方は立木のための未発掘であるが、その南に、ノロの流れを見せるように鉄滓が板上に堆積して出土した。この鉄滓の堆積地点は、すり鉢状を呈するヶ原地となっている。

この地点は、木灰・木炭片等の混入はかなりあるが東側の遺構（2号炉）程濃密ではない。

東側（2号炉）は、図3のように、北方が長方形に近く、南の方は、裾広がりの形状を示すもので、その末端近く、鉄滓の堆積を認めるものである。

この東半分（2号炉）の上、中部は、木灰・木炭・塊状の鉄滓が充満しており、西半分のもの（1号炉）とは形状・性格とも異なるように観察される。

この東半分については、炉底までは発掘しないので、深さは、不明である。図3の壁高8~12cmは、現時点の計測値である。

また裾広がりの下部、すなわち炉の前部末端は、西に傾斜を有しており、図3に示したように、この地点に鉄滓の堆積を認めるが、この鉄滓は、扁平な板状を呈しており、東半分（2号炉）の炉内に塊状鉄滓とは異なるように観察した。

むしろ、西半分（1号炉）の、すり鉢状pitに堆積した鉄滓に等しい。あるいは、西半分の炉に関係するものかも知れない。

よつて、両者を別個のものとし、西半分を1号炉・東半分を2号炉と、一応仮定することにした。

いずれにしろ、完掘しなければ、断定しがたいが、現時点では、1号炉・2号炉と名称を付しておくことにする。

・溝状遺構…既述したとおり、A区西壁より、中央部へ斜行する溝状遺構を、検出したが、この遺構内からは、木炭片・木灰を少量検出したほか遺物の出土はない。製鉄炉の周囲をめぐる溝の一部とも予想されるが結論は保留しておく。

・柱穴状pitと粘土のひろがり。

柱穴状pitは、図3に示すようにpit1~pit3を検出した。

その計測値は、図3のとおりであるが、これらのpitは、いずれも、粘土を掘り込んで構築されているものである。

粘土のひろがりは、図3に示したが、そのひろがりの範囲、厚さ、または、その機能等は、不

明である。

p i t および粘土のひろがりは、第二次調査で明らかにしたいと考える。

〔出土遺物〕 (写4~6)

出土した遺物は、りんご用ダンボトルに4分の1程度の鉄滓と、羽口片16片、および、土師器片25片、須恵器片2片、縄文土器2片、他に木炭片である。

A

B

C

④鉄滓は、さきにふれたように、ノロの流れを予測される板状の扁平鉄滓と、塊状鉄滓に形態的に分けられるが、製錬滓か、大鍛治滓かは、目下のところ断定はできない。

1号炉・2号炉の前部末端からは板状鉄滓が出土し、2号炉内とその上部、および、A、B区の第Ⅲ層よりは、塊状鉄滓が散在して出土した。(写6-38~50)

⑤羽口片は、1号炉前部より11片、2号炉前部より4片、B区西壁より細片1片出土した。個体数は、6個体以上となるようである。

ここで注目すべきは、発掘で出土した羽口片は、角柱形をなす点である。通風孔は、円形で、形態は角柱をなすものらしい。(なお、破片のため、全体器形・長さは不明である)。(写5-24~35)

⑥土師器片は、すべて變形土器の破片である。口縁部は、かなり強く外反するもの、ゆるく外反するものの二種類がある。

整形において「ロクロ」の回転水引き痕が認められる。(写4-9~13・22)

⑦須恵器片は、2片の出土であるが、1片は無文のもので底部を含む胴部下半のものである。このものは、長頸壺の破片と思われる。

他の1片は、タタキ目のあるもので、小破片のため器形は不明である。(写4-14・15)

⑧縄文土器、2片の出土であるが、縄文も明確に判別できないものであるが、横走に近い縄文が施されたものと思われる。繊維の混入はないものであるが、型式名等は不明である。(写4-2123-21・23)

なお、①~⑦とした、土師器、須恵器、縄文土器は、Ⅱ層の出土であって、B区より出土した。A区よりは、①~⑦は出土しない。

(註、写5-36・37は、スサ入り炉壁片である。→2号炉)

〔考 察〕

地主である村馬氏の発見時において、羽口の出土があり、その羽口が炉のどこに位置したかは不明である。

また、図3に示したように、1号製鉄炉の北方は、りんご立木のため発掘不能であった。しかし、炉の北側には、粘土が貼られており、D区からは、柱穴状ピットが検出されている。

また、1号炉では炉の本体、すなわち、炉の壁面、その他も未発掘である。

柱穴状p i tの所在は、製鉄炉（1号・2号）に対する上屋構造も予想しなければならない。この炉本体の予測位置やp i tの所在から遺構は北側にも所在するものと判断される。

また、地形そのものが、北から南へ傾斜しており、いわゆるノロは、図3に示す南側に流されたものと推定される。

以上は、図3に示した西側遺構（1号炉）の所見であるが、さきに述べたように、東側半分（2号炉）は、1号炉とその性格は異なるものとみられる。

1号炉の前部に溜る鉄滓の形状は、扁平な板状を呈しており、ノロの流れによるものと判断される。さらに、この地点では木炭粒等は濃密には検出されない。

それに対して、2号炉内には、木炭粒・木灰が充満しており、また、鉄滓の形状は塊状を呈しているものが多く見られる。

今回の調査では、断定はできないが、両者は、別個の性格を有する可能性が強い。

しかし、両者が同時期のものか、時間差が認められるかは、第二次調査を待たなければならぬ。今回の発掘では炉の前部は共用の可能性が強く、切り合いは確認できなかった。

すなわち、1号炉本体の発掘は、これからであるが、1号炉は、製鉄炉の可能性が強く、2号炉は、大鐵治址の可能性が強いことが推定できる。

また、最初に述べた羽口片は、1号炉のノロの溜り場より出土したものと推定されるもので、送風口は、この付近の上部にあつたのであろう。

いずれにしろ、製鉄炉か、大鐵治址か、または、（小鐵治址）かは、今後の調査によって結論を出したいたと思う。

伴出遺物は、A区では鉄滓、羽口片、木炭粒のみで年代を把握できるものはない。B区よりは、土師器片25片と、須恵器片2片が、II層より出土、また、縄文土器2片も、II層より出土した。

土師器は、ロクロの使用が認められるので、「東北北部の土師器型式第二型式」に属するものである。（變形土器）、しかし、これによって製鉄址の年代を決定することはできない。

また、縄文土器片は、多分混入したものと思われる。このものは、横走する縄文が施文されるものであるが、型式名の確認は困難であった。

製鉄址の発掘報告は、西北五地方では、西郡に多く、北五地方では、七夕野遺跡（金木町）のみであろう。

中央の研究者は当地方で、鉄製品の出土があったとき、西郡の遺跡に関連を求める傾向があるようと思われる。

しかし、北五地方においては、梵珠山脈の西麓地帯において、製鉄遺跡の所在は、相当あるように確認できる。

ただ、製鉄址に関する研究が遅れているため、すでに報告されているものに関連を求めるのであろう。

当孤野製鉄遺跡の解明は、歴史時代における鉄の生産、加工という生産活動をとおして人々の生活様式や技術史の解明に迫れるかも知れない貴重なものである。

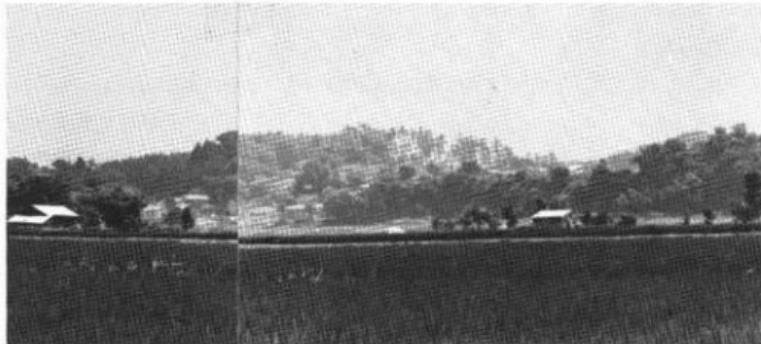
第二次発掘調査に期待したいと考える。

☆参考文献

1. 高橋 一夫 「埼玉県伊奈町大山製鉄遺跡の調査」考古学ジャーナル8月号 1975
2. 薮田 藏郎 「発掘鉄滓の考察」 考古学ジャーナル6月号 1976
3. 薮田 藏郎 「入間砂鉄と特殊製鉄遺跡」 考古学ジャーナル9月号 1971
4. 薮田 藏郎 「入間砂鉄と特殊製鉄遺跡」（補稿）考古学ジャーナル2月号 1972
5. 村越 潔 「若山遺跡」「岩木山」 岩木山刊行会 1968
6. 成田末五郎・小山連一 「大館森山製鉄炉遺構」「岩木山」 岩木山刊行会 1968
7. 戸沢 武 「大館山山・大平野両製鉄址について」 岩木山 岩木刊行会 1968
8. 小山 連一 「大平野Ⅲ号遺跡」「岩木山」 岩木山刊行会 1968

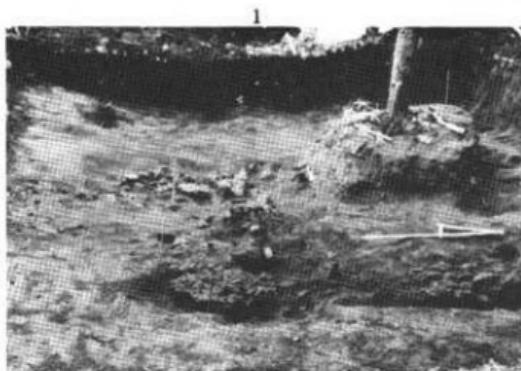
(写1)

↓高橋城跡 (北西より写す) ↓狐野遺跡

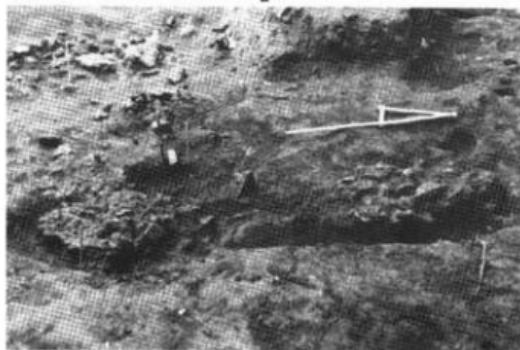


☆A区遺物出土状況
(東方より写す)

(1号・2号製鉄跡の
出土状況)



2



☆2号製鉄跡のアップ
(東方より写す)

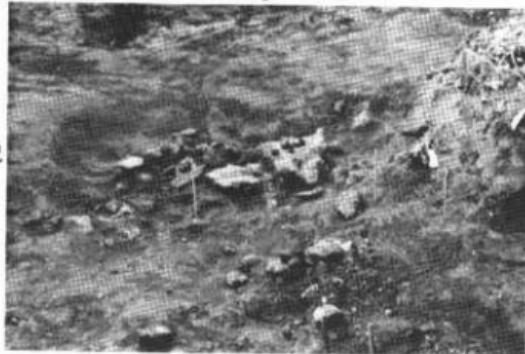
(写2)

3



☆1号製鉄跡の出土状況
(東方より写す)

4



☆1号製鉄跡鉄滓出土状況
(東方より写す)

5



☆同上アップ

(写3)

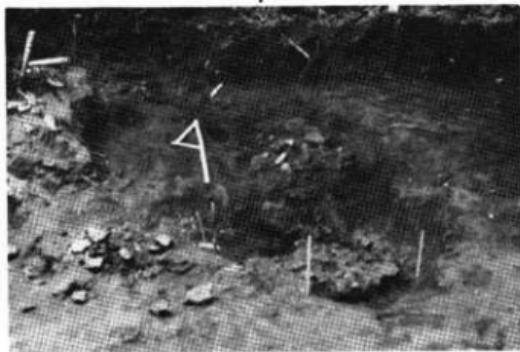
6



☆1号製鉄跡出土状況
(西方より写す)

☆同上アップ
(南方より写す)

7

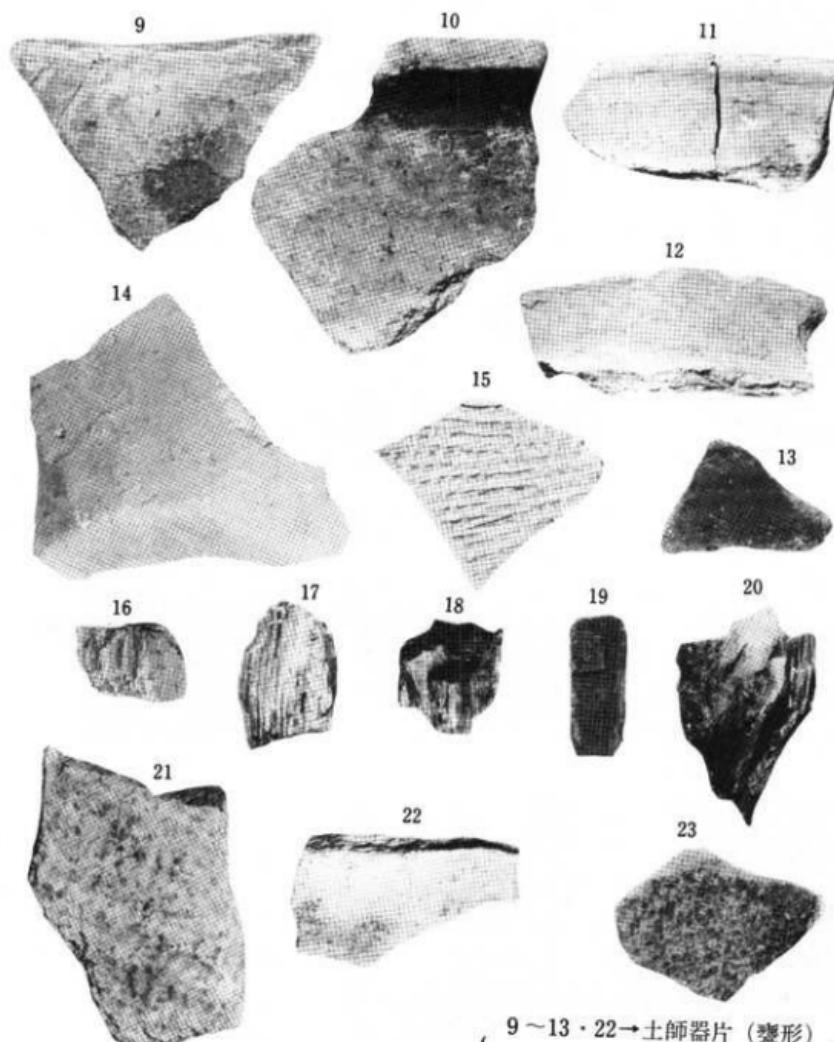


8



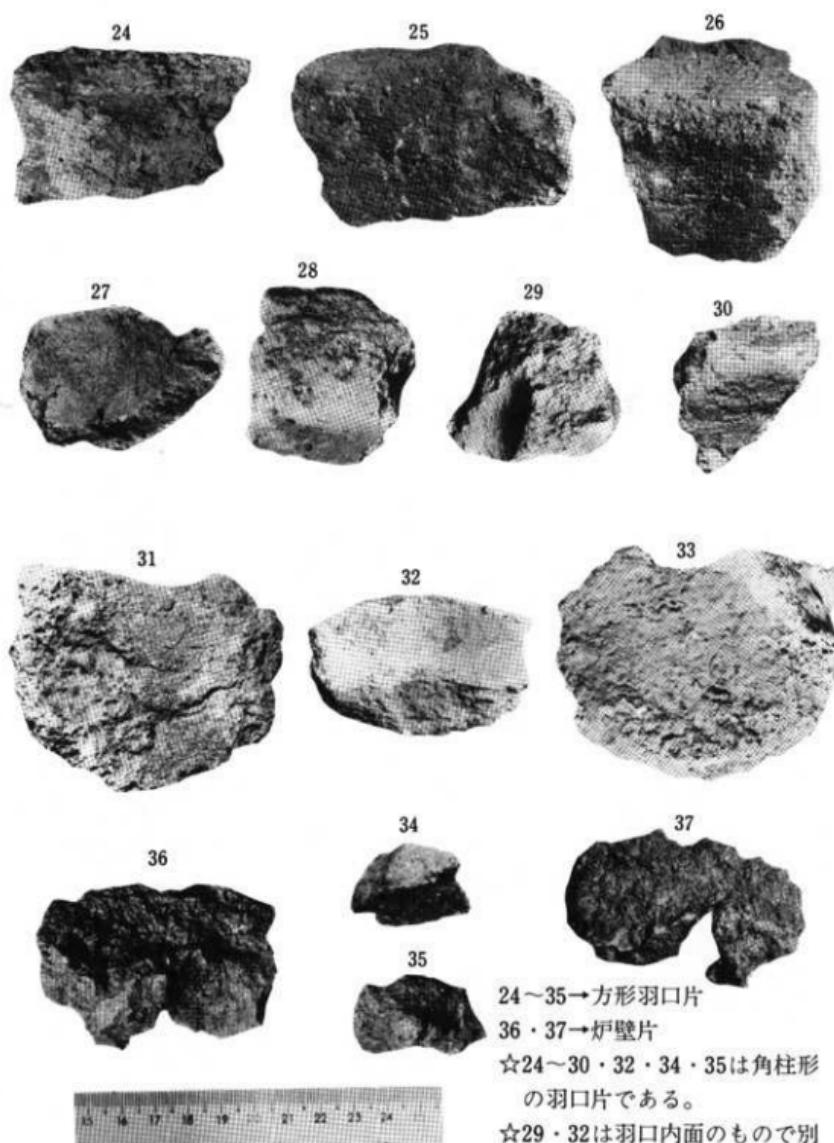
☆2号製鉄跡のアップ
(西方より写す)

(写4) 出土遺物 (土師器・須恵器・木炭・縄文土器片)



9 ~ 13 · 22 → 土師器片 (變形) 14 · 15 → 須恵器片 16 ~ 20 → 木炭片 21 · 23 → 縄文土器片	}
---	---

(写5) 出土遺物(羽口片と炉壁片)



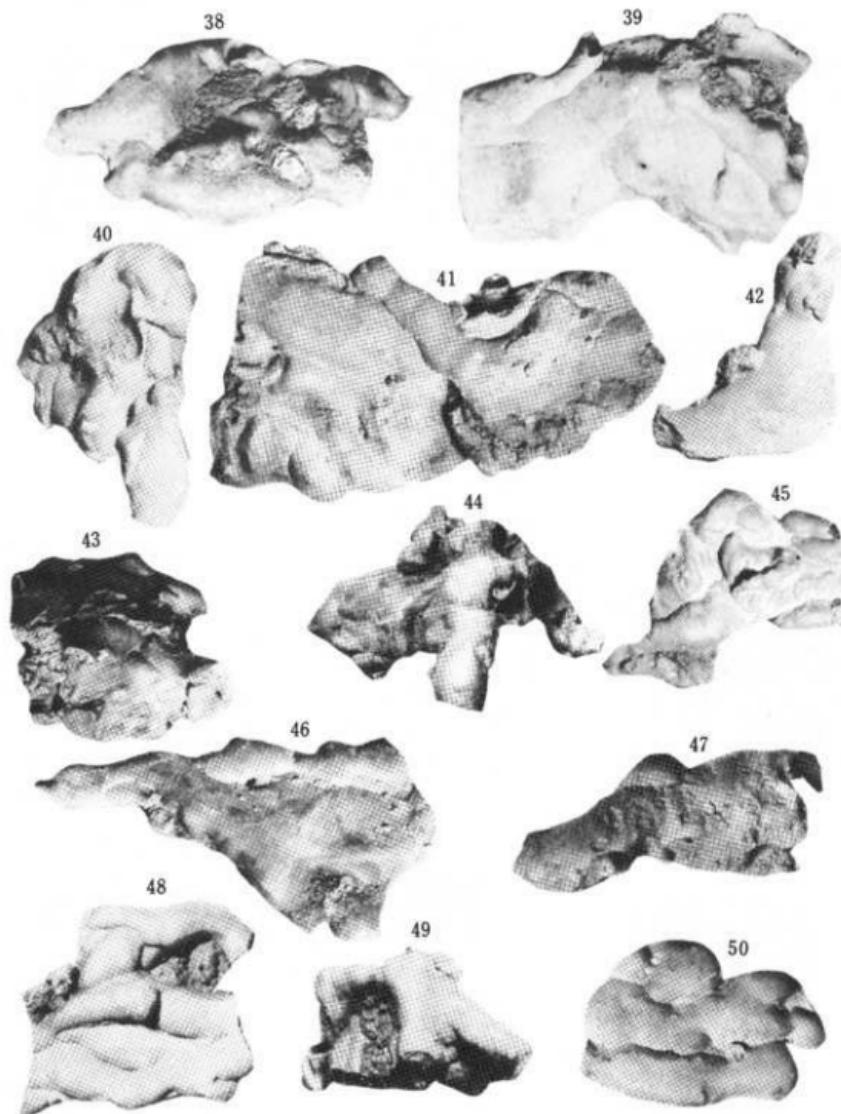
24~35→方形羽口片

36・37→炉壁片

☆24~30・32・34・35は角柱形
の羽口片である。

☆29・32は羽口内面のもので別
個体

(写6) 出土鉄滓



[おわりに]

わずか2日間の発掘であったが、遺構の範囲が推測より広かつたため発掘を一時中止したのが残念であった。

当五所川原市内に、歴史時代の製鉄に関する遺跡が所在することを確認できたとだけでも喜ばしことである。第二次発掘調査に期待をかけたい。

また、極暑の候応援下さった下記の方々に謝意を表してご芳名を明記します。(文責新谷)

五所川原市教育委員会

○社会教育課 課長 三浦 新一

　　課員 時田 武則

　　タク 中村 健

○保健体育課 タク 鈴木 誠一

　　タク 奈良岡 洋

○土地所有者 対馬 卓美

対馬 昭雄

対馬さう子

○飯詰中学校3年生 6名

○調査員 羽野木沢小学校 岩崎 繁芳

○発掘担当者 五所川原第二中学校 新谷 雄藏

